

訪 問 国：オーストラリア

研修テーマ：キャリア教育の充実

所属名 千葉市立幕張西中学校

氏 名 清 水 俊 也

1 はじめに

今回のオーストラリアでの視察では、教育現場でキャリア教育・職業教育をどのように推進するかについての調査研究を心がけた。

また、千葉市学校教育の課題「21 世紀を拓く」にある進路指導・キャリア教育の目標を見つめ児童生徒一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てる教育活動の充実を図るための手立てを探る研修とした。

2 オーストラリアの教育状況

オーストラリアでは、1901 年に制定されたオーストラリア連邦憲法の規定により、教育に関する事項は各州政府の責任とされている。

就学前教育は、3～4 歳児（Pre-School）と 5 歳児を対象とした Kindergarten（州により名称は異なる）で行われている。

初等学校は 1～6 年生もしくは 7 年生、それに続く中学校と高等学校を合わせた中等学校 7 年生もしくは 8 年生～12 年生とされており、州によって異なる。一方で、義務教育の修了年齢は、2010 年以降はすべての州で 10 年生の終わりまでと統一された。そして、17 歳になるまでは正規の教育・訓練課程もしくは労働に従事することが求められている。10 年生を修了すれば前期中等教育修了書が授与される。

さらに 11、12 年生に進学すると、修了時の試験を経て後期中等教育修了認定書を取得することができ、この 2 年間で高等教育機関へ進学するための準備期間と考えられている。

高等教育機関には大学と TAFE（ティフ：Technical and Further Education）と呼ばれる高等職業専門学校があり、TAFE とほとんどの大学は国立・州立学校である。

オーストラリアでは、「オーストラリア教育資格システム AQF（Australian Qualifications Framework）」という資格制度の下、国内の TAFE や大学などで取得できる特定の資格・学位を全国的に認定している。AQF はその認定基準を明確にし、教育・訓練機関にその質を維持するよう促す役割を担っている。取得した単位や資格は別の教育機関でも認められるため、あるコースを修了した学生は、新たな資格を目指したり、他の学校で上級レベルのコースに進んだりすることもできる。また、大学卒業後に TAFE で資格を取得する者もいる。後期中等教育を修了する 12 年生の進路は、大学・TAFE・就職へそれぞれ全体の 3 分の 1 程度ずつである。

キャリアアドバイザーは、日本の高等教育にあたる学校に配置されている。キャリア教育を担当しており、職場体験についての相談や斡旋など職業に直結するものだけではなく、カリキュラムを適正に選択するためにカウンセリングを行っており、生徒の将来に向けての進路選択に大きく関わる重要な仕事を担当している。

3 学校訪問をして

（1）「マッケランド・カレッジ」の取組

メルボルン南部に位置する男女共学校である。将来の職業に対する具体的なビジョンに乏しい生徒が多いと説明を受けた。



そのため学習意欲に欠け不登校や非行に走る生徒が多いという課題を克服するために『新しい教育スタイルの導入』と『キャリア教育に力を入れること』で改革に成功した中高一貫校である。オープンスタイルの授業形態を取り入れ、生徒の理解度、興味関心に応じた小グループを形成し、複数の教師が熱心に指導にあたる様子が特徴的であった。7年生より『グローバルリテラシー』という科目や国語の授業を通して、自分の能力や価値観について考える自己啓発や職業に対する学習に取り組み、情報分析能力やコミュニケーション能力の育成を図るとともに、将来の自己実現に向けて真剣に向き合う姿が見られた。これらの実践により、自分の夢を実現するためには資格の取得が必要であることや選択肢を広げるためには幅広い学習が必要であることを知り、学習の向上につながるという成果が見られたという話を聞くことができた。

また、生徒の発表からも、自由な雰囲気の中で自分にあった学習スタイルで自分の興味関心を伸ばすために自由に学ぶことができ満足しているという声を聞くことができた。

(2) 「ハーバーフィールド・パブリック・スクール」の取組

全校児童 630 人程度の多種多様な文化圏の人種が集まる小学校であった。生徒の能力を早期に分析し、より適切な学習環境を用意することこそが「キャリア教育の充実」につながるという理念に基づいた教育が実践されていた。



5 歳時に空間的思考力を判断するテストを実

施し、その結果、能力があると判断された生徒を入学時より集め、より高度な教育を施すことで、高い学業成績を残すことを目指す一方で、自閉症やダウン症などの児童で小グループを組織し、献身的なスタッフによる手厚い指導を行っていた。小さい頃から、生徒の能力を引き出し、技能を伸ばせるよう、ダンス・音楽・オペラ・サッカーなどの本格的な指導者や、医者・ICT関係で働く保護者や地域の人材を招き、本物に触れる機会を設けることで自己の能力の適正に気づくことができるような教育を行っていた。

生徒の才能に適した、様々な機会を提供し積極的に取り組ませることで「何事にも一生懸命に学ぼうとする学習規範」「現実の世界で困難に立ち向かっていく抵抗力」などを育成することを目的とした教育実践が繰り広げられている学校であった。

4 研修成果の活用

オーストラリアの研修で印象に残った言葉がある。それは、次の言葉である。

- ・失敗から学ぶ。失敗を恐れない。
- ・互いのつながりを大切にする。
- ・挑戦する生徒を育てる。(自尊心を育てる。)

オーストラリアも日本も同じような課題や考え方で取り組んでいるように思えた。

キャリア教育の推進を図るには、「職場体験」「職業調べ」等の活動は、有効であるが、それらは年に数回しか行うことができない。生徒のキャリア発達を促すためには、日頃から、自己理解と自己有用感が感じられる取組を積み重ねることが必要と考える。

各教科、道徳、特別活動の年間指導計画等に「キャリア教育」の目標である自己の進路・将来を主体的に考えることができる力を育成する指導と社会的・職業的自立を目指し、児童生徒一人一人のキャリア発達を促す教育活動の充実を図ることが大切である。